

<p>SKYLIGHT 〈今月の焦点〉</p>	<p>ブレーザーの多波長同時観測と粒子加速への示唆</p>	<p>片岡 淳 373 高橋 忠幸 谷畑 千春 窪 秀利</p>
<p>EUREKA 〈研究紹介〉</p>	<p>星間ガスの数値モデル化の試み</p>	<p>和田 桂一 381</p>
	<p>銀河宇宙線がつくる“太陽の影”と太陽活動</p>	<p>湯田 利典 391</p>
<p>書評</p>	<p>ビデオ「元素誕生の謎にせまる」増補版</p>	<p>大島 修 399</p>
<p>シリーズ</p>	<p>《海外研究室事情 (32)》 Department of Physics, University of Oxford オックスフォード大学物理学研究部門</p>	<p>釜谷 秀幸 400</p>
<p>雑報</p>	<p>2001年度内地留学奨学金による成果報告書</p>	<p>加藤 雄二 402</p>
<p>月報だより</p>		<p>404</p>

[表紙説明]

高精度数値流体シミュレーションが描き出した渦巻き銀河の低温の星間ガスの密度構造。図の軸の数字は、スケール（単位はキロパーセク）、カラーは、表面密度の対数（単位は太陽質量/パーセク²）。(a) 100パーセクおよび (b) 10パーセクの分解能で「観測」した場合。(a) を野辺山ミリ波干渉計でみた系外銀河の分子ガスイメージとすると、ALMAでは、(b) のような星間ガスの微細構造が得られることが期待される。(c) 銀河中心部 500×500 パーセクの星間ガス構造。(d) おなじく、「腕」の付け根部分の構造。領域によって、ガスの空間微細構造が大きく異なることがわかる。

(EUREKA「星間ガスの数値モデル化の試み」参照)